

第二章 先史時代

第一節 奄美の先史時代

一 概説

九州と台湾の間に連なる薩南・沖縄・先島の諸島は南島と呼ばれ、日本列島のなかで先史時代の様相を把握しにくい地域となっている。明治時代以降、調査の絶対数が少なく、明治末に鳥居龍蔵博士が城岳貝塚・荻堂貝塚・伊波貝塚・天願貝塚を発見したことによって初めて遺跡の存在が判明した。大正時代になって松村瞭博士が荻堂貝塚、大山柏公爵が伊波貝塚、小牧実繁・西村真次・橋本増吉・金蘭丈夫博士らが城岳貝塚を発掘し、昭和初期には島田貞彦氏の崎樋川貝塚、廣瀬祐良・小原一夫・三宅宗悦博士らの面縄貝塚発掘があり、三宅博士にはほかに宇宿貝塚・喜念原始墓の発掘がある程度で、調査された遺跡数も十指に満たないものであった。

そのあと久しく調査が途絶えていたが、昭和三十年の九学会による奄美大島の先史時代の調査で、宇宿貝塚を発掘し、遺跡の上層から、宇宿上層式土器（無文土器）、下層からは、宇宿下層式土器（有文土器）を出土した。これらの土器形式は、奄美諸島全域に見られるものであることが判明した。

宇宿下層式土器は、本土の縄文後期の、市来式土器を伴ったことから、下層式土器のうちに、縄文後期と同時期の土器があるという大発見があった。この事実によって初めて奄美の土器を、本土の土器と同じ規準で論ずることができるようになった。

一方、奄美諸島の土器は本土的というより南につながるをもつもので、南の土器と一括して考えることができ、宇宿貝塚は奄美と沖縄を結ぶ同一系統土器文化の北端に位置して南九州と接触する姿をあらわしていると考えられる。

以来、考古学の調査はさらに進んで、沖縄・奄美における遺跡、遺物の様相が、明らかに became したがって、両者に共通する土器文化が存在することも判明し、両地域の先史文化が、共通の文化圏に属することは、もはや

疑いない。これを南島先史文化圏と呼ぶことができよう。

南島先史文化と本土先史文化との交渉の跡は、宇宿貝塚において、縄文後期の市来式土器、一湊式土器が発見され、瀬戸内町嘉徳遺跡では、市来式土器のほかに同じく縄文後期の小池原下層式土器が発見され、縄文時代後期には本土との交渉が、広域に渡って行われていたことを示している。

読谷村における渡具知東原遺跡の調査は、曾畑式土器、貝殻条痕文土器の発見によって、一挙に、本土との交渉が縄文時代前期までさかのぼることを示した。同様の発見は奄美の高又遺跡でも見られ、その普遍性を示している。渡具知東原の第二次調査では、曾畑式土器より下層からヤブチ式土器（爪形文・押圧文）を発見し、縄文草創期の爪形文と対比されるようになった。爪形文土器は、奄美においても、ヤーヤ洞穴、高又遺跡のほか、最近、中甫洞穴でも発見された。

弥生土器の発見も、沖縄・奄美ともに、地元の土器にまさって発見されていたが、近ごろ、弥生の遺跡として発見されるようになった。笠利町のサウチ遺跡がそれで、前期から後期まで続いた遺跡である。

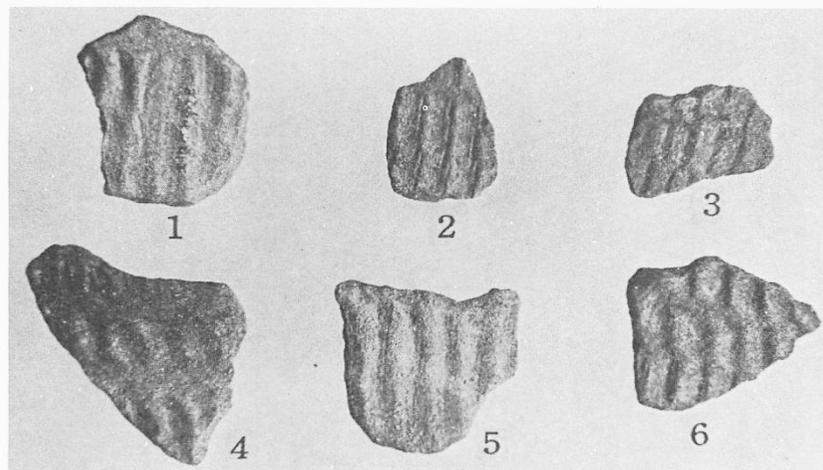
二 早期

奄美諸島で最も古い遺跡は、笠利町土浜のヤーヤ洞穴と中甫洞穴である。中甫については後述するので、ここではヤーヤ洞穴について述べる。ヤーヤ洞穴は、笠利半島の基部にあり、海岸砂丘の内側にある隆起珊瑚礁にできた洞穴遺跡である。二層の包含層があり、上層からは、甕形土器・条痕文土器・無文土器・凹文土器、下層からは、沈線文土器・条痕文土器・貝殻押圧文土器・凹文土器が出土した。

上述の土器のうち、凹文土器が奄美最古の土器と考えられる。沖縄県ヤブチ洞穴で発見された土器と同じ型式であるところから、国分直一・三島格氏によってヤブチ式と名付けられた。

ヤブチ式は、深鉢形丸底の器形で、文様は指頭押圧文を横に並べ、器面全体に施すもので、時に爪形を残す例もあり、また裏面にも指頭の圧痕を印すものも見られる。

沖縄県読谷村渡具知東原遺跡で、縄文土器の曾畑式土



1. ヤーヤ遺跡出土ヤブチ式土器（「水産大学校研究報告，人文科学編ヤブチ式土器」より転載）

器を上層から、爪形文土器を下層から、さらにヤブチ式土器を最下層から出土したことによって、ヤブチ式土器の古さが見直されることになった。

ヤブチ式土器は、本土の福岡県門田遺跡出土の爪形文土器と酷似し、草創期に属する可能性が考えられた。また昭和五十八年には、沖縄県嘉手納村野国貝塚の発掘によって、大量の爪形文土器が発見され、地元で生産されたものであることも判明した。

笠利町高又遺跡では、三、四層からローリングを受けたヤブチ式土器片が出土している。この包含層は標高にして、四・七三メートルから三・六八メートルの高さにある。

笠利町サウチ遺跡の調査によると、縄文時代最大海進時(C-14、6630±150Y・B・P.)の汀線は標高四メートルと推定される。したがって、高又遺跡のヤブチ式土器の包含層は、最大海進時には汀線を中心に挟む高さがあり、主としてヤブチ式土器を出土した四層は、ほとんど汀線以下にあったことになる。

高又遺跡出土の土器のうち、ヤブチ式土器だけがローリングを受けているのは、最大海進時に汀線以下に没し

たためと考えられ、この時期にはすでにヤブチ式土器は存在していたことを示している。

渡具知東原遺跡のヤブチ式土器包含層の、貝によるC-14年代は、6450〜6670Y・B・P.である。この数値は、縄文時代の最大海進時と一致する。測定に使用した貝は当時遺跡地に生息していたものである。ヤブチ式土器は、台地上の遺跡地から押し流されて、堆積したものであるから、成立年代はさらにさかのぼるもので、貝の生息年代より古い時期と考えられる。

高又遺跡・渡具知東原遺跡・野国貝塚の状況からみて、ヤブチ式土器の成立年代は、縄文時代の最大海進時以前の時期であろう。

三 前期

南九州では、貝塚の数がきわめて少ない。縄文時代早期に属するものはなく、前期後半になって初めて出現する。不思議に西海岸にかたよって分布し、種子島の苦浜貝塚、薩摩半島の上焼田貝塚・阿多貝塚、出水平野の庄貝塚、宇土半島基部の轟貝塚・曾畑貝塚などがある。出

土する土器は轟式と曾畑式に限られ、沖縄・奄美の遺跡と密接な関係をもっている。南九州西海岸において、内陸から海岸へ進出して貝塚が営まれた時期に、沖縄・奄美との間に、密接な交流が始まったことは間違いないところである。

高又遺跡の用水路左岸では、下層から曾畑系土器を出土している。一片は本土からの移入であるという。おそらく遺跡地全域には曾畑式土器そのものも埋存することは確実と考えられる。宇宿貝塚・アヤマル遺跡においても曾畑式土器の発見がある。

また高又遺跡用水路右岸の下層からは、砲弾形尖底の貝殻条痕文土器二個が、重なりあって出土している。

貝殻条痕文土器は、瀬戸内町嘉徳遺跡、笠利町ヤーヤ洞穴・宇宿貝塚にも少量出土しており、喜界町赤連遺跡にも見られ、赤連系土器と呼ばれている。

十島村の宝島大池遺跡では、本土の縄文前期の轟Ⅲ式土器と赤連系土器とが共伴出土している。

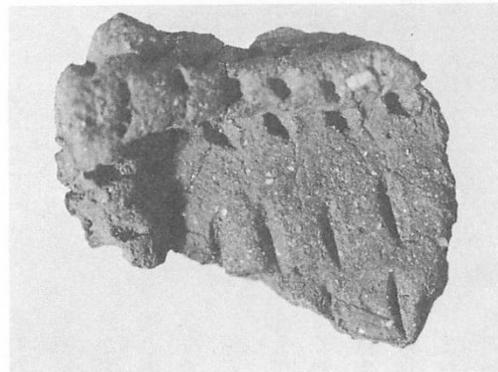
曾畑式土器は九州の西海岸に、轟式土器は九州全域に分布する縄文前期末の土器型式で、轟Ⅲ式と曾畑式土器は、志布志町片野洞穴では共伴出土している。

高又遺跡出土の曾畑式土器出土層の貝による、C-14年代はN-3107、4450Y・B・Pであるが、この層からは、ヤブチ式・曾畑系・面縄前庭式の三型式の土器が出土している。大池遺跡のC-14年代は4820±95Y・B・Pである。

最近、沖永良部島の中甫洞穴や神野遺跡からも甌式土器および甌式系統の土器が発見され、奄美におけるこの時期の様子がだいぶわかってきた。



2-1. 宇宿貝塚出土・貝殻条痕文土器(縄文中期)



2-2. 宇宿貝塚出土・貝殻条痕文土器(縄文中期)

四 中期

中期の土器と考えられるものは、宇宿貝塚の最下層から少数出土している。深鉢形土器の口縁部で粘土紐を貼り付け、刻み目を施したもので、器面に貝殻条痕を施している。他の一個は、同じく深鉢形土器の口縁部で、粘土の凸帯を施した上から貝殻縁で押圧し、器面には縦に爪形文を施している。胎土に白粉を含まずから、あるいは地元で作られたものかもしれない。共に焼成は良好である。

南九州の縄文土器で、中期末に凸帯貼り付け土器があり、出水貝塚・麦ノ浦貝塚・石郷遺跡・春日遺跡・飛岡遺跡などで発見されている。

奄美・沖縄を通じて、中期の文化に関する資料は大変少ない。将来中期に関する遺物が発見される機会は、あるとは思われるが、多くを期待することはできないように思われる。中期の生活環境になんらかの制約があった

たように思われるからである。

五 後期

奄美の土器と本土縄文土器とが、明確に結びつくのは、いまだに市来式土器と面縄東洞式土器との関係だけである。昭和三十年の宇宿貝塚調査によって、宇宿下層式土器と縄文後期の市来式土器および一湊式土器とが共存出土して以来、奄美・沖縄を通じて、本土の各時期の縄文土器、あるいはその影響を受けた土器の発見は、相当の数のにぼっている。しかしそれらに対応する南島の土器は明らかにされていない。

市来式土器は、その後沖縄の浦添貝塚、奄美の嘉徳遺跡・面縄第I貝塚・喜念貝塚などでも発見され、この時期の本土と南島の交流が広範囲に渡るものであることが明らかにされた。

南九州では、前期末の貝塚形成以後、貝塚の形成はほとんど見られない。後期になって前葉を過ぎ中葉にさしかかって、市来式土器文化の発生期に至って、鹿児島湾岸に武貝塚・草野貝塚、西海岸に市来貝塚・尾賀台貝

塚・出水貝塚・南福寺貝塚などが急に形成されているが、これにはなんらかの原因があるはずである。

市来式土器のC-14年代は、3500Y・B・Pとされているが、日本列島は、四千〜三千年前ごろには、汎世界的な海面低下と小氷期的な寒冷気候の下にあり、気候悪化により縄文文化は大きな打撃を受けている。縄文時代中期末・後期には、中部山岳地帯や東日本では遺跡数が激減しているのに対し、西日本の岡山などでは遺跡数が漸増し、焼畑農耕の導入によるのではないかという説もある。

気候悪化への対応は、地域と時代によって種々であったと思われる。南九州にあつては、縄文後期前葉の指宿式土器文化では内陸に分布し、消極的であったのに対し、縄文後期中葉の市来式土器文化では、海岸へ分布を広げ、積極的な対応を示し、盛んに貝塚を形成し海外へ発展していったのである。

南九州と南島との交流が、この時期に急に活発に行われたのは、このような流れの一環と考えられる。

昭和五十三年に行われた宇宿貝塚の再調査では、宇宿下層式のうち最も古い型式である面縄東洞式土器と市来

式土器とが、敷石住居址内で共伴出土して両者の関係を一層明確なものにした。(N-3378、敷石住居址貝、C-14、3510±65Y・B・P.)

面縄東洞式土器は、面縄第四貝塚の東洞穴最下層から出土する土器を標式とする、平底深鉢形の器形が主であるが、上げ底の脚台を有する二重口縁土器という独特の土器を創造している一面、市来式土器の影響と見られる脚台付皿形土器も製作している。籠かごをモチーフにした文様を押し印の手法で施文しているのが特徴で、それ以降の奄美の土器の文様の基本になっている。南島で発見された市来式土器は、古いものから新しいものまであり、本土と南島との交流は、およそ市来式の発生期から終末期まで続いたものと考えられる。

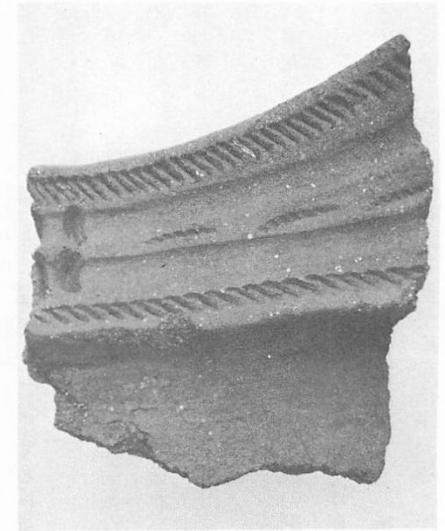
この期間に市来式の土器製作法が、面縄東式の土器製作に相当の影響を与えている。深鉢形の土器では、口縁部を厚くして、断面が三角形に作られたもの、面縄東洞式に見られなかった波状口の器形、器面調整に貝殻縁を使用したもの、このほか、市来式の施文法まで取り入れたものなどのほか、新たに台付皿型土器を制作するなど、一時的な交易の程度では、到底考えられないほどの影響

である。まして女性が土器制作に携わったとするならば、婚姻などを通じ定着もあつたと考えるのが適当であろう。ここで注意すべきことは、市来式の土器の影響を受けた土器製作にあつた、ただ一つだけであるが、絶対に守らなければならなかつたことがある。それは面縄東洞式の特徴である「押し文」を必ず施文することであつた。おそらくこの社会の掟おきてとでも見るべきもので、この文化圏に属する土器製作者のすべてが、従わなければならない規制であつた。

南九州と南島との交流のなかで、特に交流の盛んであつた市来式の時代においても、その流れは常に一方的で、南島にもとづく遺物が、本土においては、まったくと言ってよいほど発見することができない。これは不可解なことであつた。最近、昭和三十六年に発掘した市来貝塚の貝輪を調べていたら、市来式土器の包含層から出土した、半製品のオオツタノハ製貝輪を発見して狂喜した。オオツタノハは奄美以南に生息する貝である。市来貝塚出土の貝殻にはもちろん含まれていない。いうまでもなく、この貝輪の素材となつたオオツタノハは、奄美または沖縄からもたらされたものである。貝が、縄文時



3-2. 面縄東洞式土器
(宇宿貝塚敷石住居址出土)



3-1. 市来式土器
(宇宿貝塚敷石住居址出土)



3-3. 宇宿貝塚敷石住居址—A市来式土器、B面縄東洞式土器、C面縄東洞式土器(復元したもの)

奄美大島土器の編年

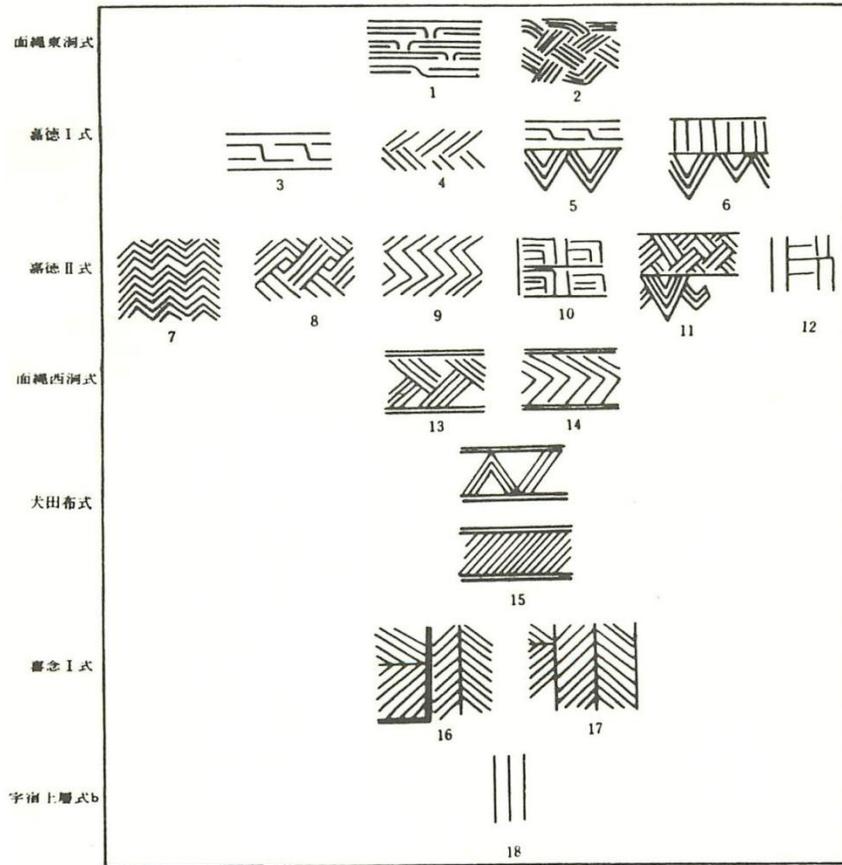
形式名	出土遺跡	器形	宇宿式	南九州との関係
1 面縄東洞式	宇宿, 面縄II・IV	深鉢平底	下層式	市来式(縄文後期)
2 嘉徳I式	宇宿, 面縄II・IV, 嘉徳	深鉢平底	下層式	
3 嘉徳II式	宇宿, 面縄II・IV, 嘉徳	深鉢平底	下層式	
4 面縄西洞式	宇宿, 面縄IV, 犬田布	深鉢平底	下層式	
5 犬田布式	犬田布	深鉢, 壺形, 平底	下層式	
6 喜念I式	宇宿, 喜念	甕鉢, 壺形, 丸底	下層式	
7 宇宿上層式b	宇宿, 喜念	甕鉢, 壺形, 平底, 丸底	上層式	山ノ口式(弥生中期)
8 宇宿上層式a	宇宿, 喜念	甕鉢, 壺形, 平底, 丸底	上層式	



4-2. 面縄西洞式土器(サウチ遺跡出土)



4-1. 嘉徳I式土器(嘉徳遺跡出土)



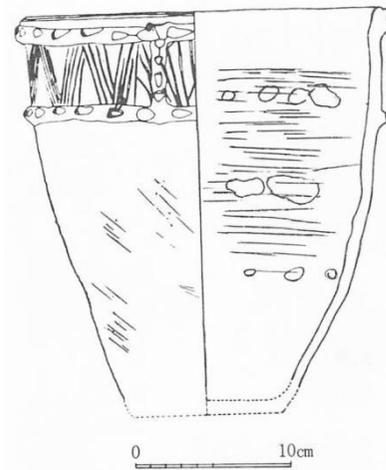
図G 奄美の先史土器文様

代の南島交易品の一つであったことを示す、唯一の資料となったのである。貝のほかにも種々の交易品があったと思われるが、有機物が残存しにくいという条件も、今日交易品とされる資料の発見が困難な原因であろう。

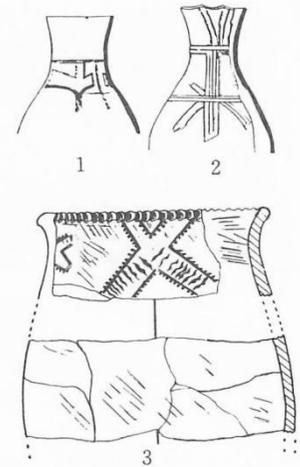
六 土器の編年

面縄東洞式土器以降の土器編年は、次の表のようにまとめることができる。

文様の変遷を見ると、面縄東洞式土器の押引による籠編状の文様が基本形になっている。次の嘉徳I式は、面縄東洞式の文様を沈刻線で縁取りしたもので、嘉徳II式は、さらに押引の手法がなくなつて、沈刻線のみで文様が構成されている。面縄西洞式は、口縁部と頸部にそれぞれ一条の刻み目凸帯をめぐらし、凸帯間には羽状または編み目沈線文を施すものである。(H図) 犬田布式は、面縄西洞式に類似するが、上部凸帯は口唇部と癒着したものもあらわれ、一体に細くなる。器形は深鉢形および甕形の平底である。次の喜念I式への漸移の様相が見られる。(G図)



図H. 面縄西洞式土器(サウチ遺跡出土)



図A. 1・2 宝島浜坂貝塚
3 ヤーヤ洞穴
(考古学雑誌50—2より転載)

の中で画期的な位置を占めるものである。

宇宿上層式土器は最も大量に生産された土器で、土器の大量生産体制ができたことを示している。器形は、喜念I式に続いて壺形土器と甕形土器の二種類のセットからなっている。その時期については、従来、種々模索されて来たが、確定的な結果が出ていなかった。宇宿貝塚の調査では、宇宿上層式土器と弥生後期の土器との伴出が認められた。

壺形土器は丸底、甕形土器は平底で、共に口縁部は、断面三角形、蒲鉾形、帯状に肥厚するもの、直口のものなどがある。胎土は粒子が細かで砂粒を混ぜず、焼成は良くない。色調は黄褐色を呈するものが多く軟質で、風蝕を受けやすく、ほとんどの土器が、器面が荒れ、破損面は摩擦して丸味を帯びるのが常である。口縁部に刻線の残存する土器が、宇宿上層式b、全く文様のないものが、宇宿上層式aである。

壺形土器で注意されるものに、宝島浜坂貝塚下層出土の土器(A図1・2・3)がある。文様は直線を組み合わせて枠をつくるもので、X字状に交差するなどの共通点があり、2の土器は枠にそってケバを刻み、3の土器は連点を施している。特に3の土器の口縁部の刻み目は、面縄前庭式の口縁部との類似点が目立つ。これらの土器の編年については、現在のところ資料不十分で、今後の研究に待つほかはない。

喜念I式には壺形土器と甕形土器とがあり、口縁部はわずかに外反し、頸部はしまり、胴部はやや張り、底部は壺形土器は丸底、甕形土器は平底である。口縁部は直口のもの、三角形の断面を呈するもの、蒲鉾形に肥厚するものなどがあり、口縁部には一条ないし三条の細いみみずばれ状の凸帯をめぐらし、縦位の凸帯を加えたものもあり、凸帯にそって連点を施するのが特徴である。頸部から胴部にかけて、斜行文、綾杉文、羽状文などの沈刻線を不規則に施文するのも特色となっている。胎土は粒子が細かで砂などを混ぜず、焼成は悪くてもろく、色調は黄色味を帯びて脆弱の感じがある。有文土器(宇宿下層式)に属するが、質は無文土器に近く、土器の流れ

七 弥生文化

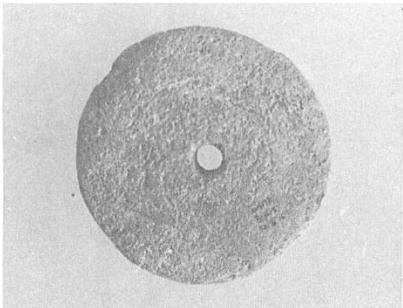
奄美諸島に弥生文化は定着していたのか否かは、久しく疑問とされた問題であった。弥生土器は採取されても、遺跡としての発見がなかったからである。昭和五十二年に行われた、笠利町サウチ遺跡の調査によって、この問題は解明された。

サウチ遺跡は、笠利湾に突き出した打田原半島の西岸で半島の北端に近い海岸砂丘に位置している。背後には、標高八十メートルで低い急峻な山地をひかえ、砂丘との間には、山麓からの湧水による低湿地がひろがっている。弥生時代初期の遺跡立地条件に、ぴったり一致する自然条件をそなえたところである。

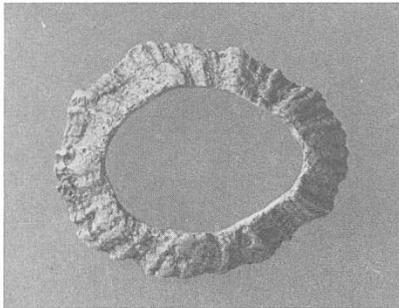
遺跡は海岸に面する標高九・二メートルの砂丘に形成され、相互に無遺物層を挟んだ二つの遺物包含層からなっている。下層は面縄西洞式、中層は弥生前期・中期、上層は弥生後期の層である。



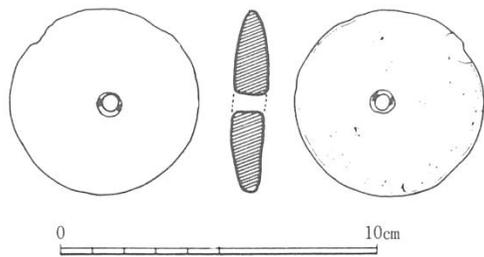
6-1. サウチ遺跡・珪岩礫配石土壌



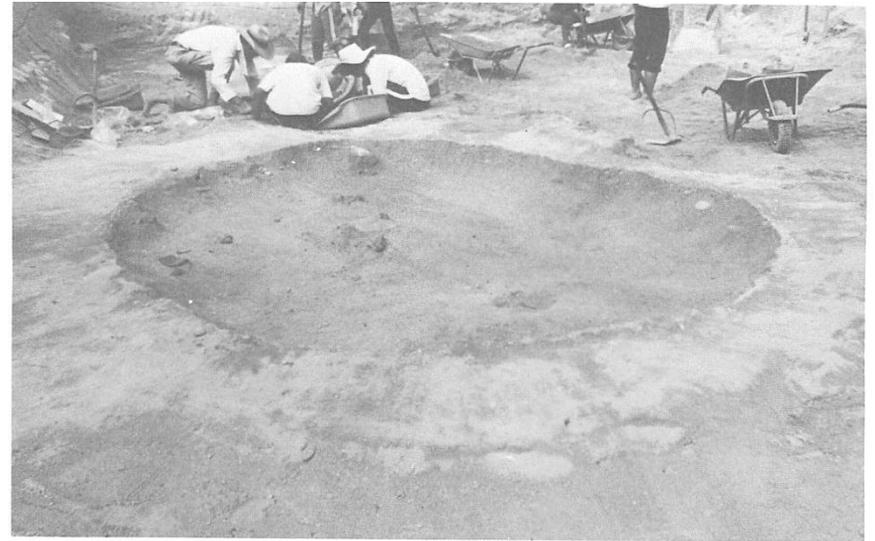
6-3. サウチ弥生前期住居址出土紡錘車



6-2. サウチ土壌底より出土したオオツタノハ製貝輪



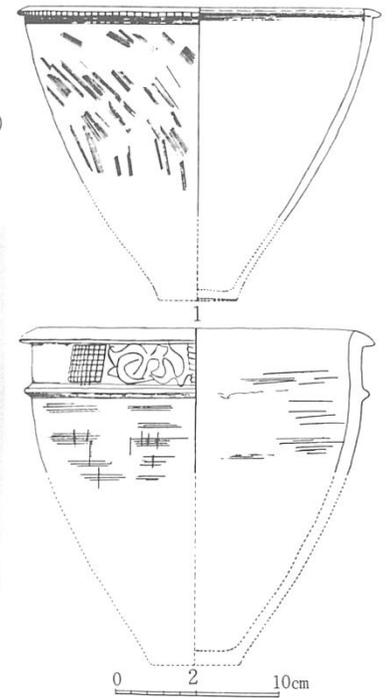
◀ 図C・紡錘車実測図



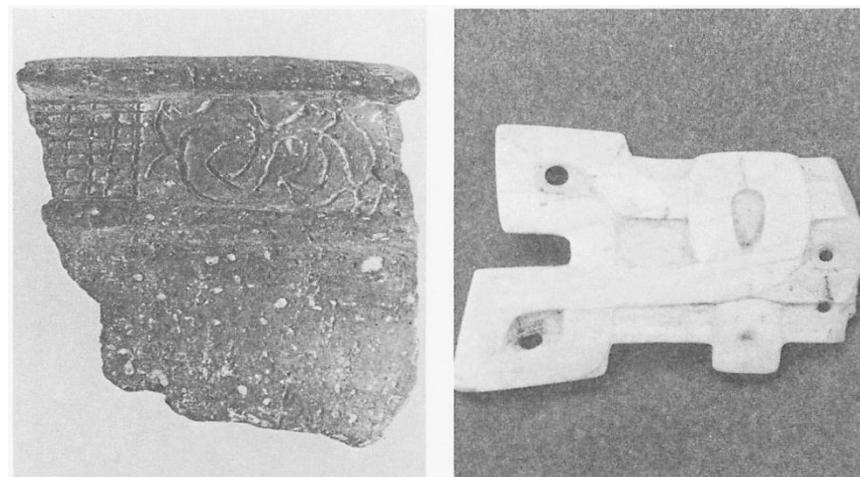
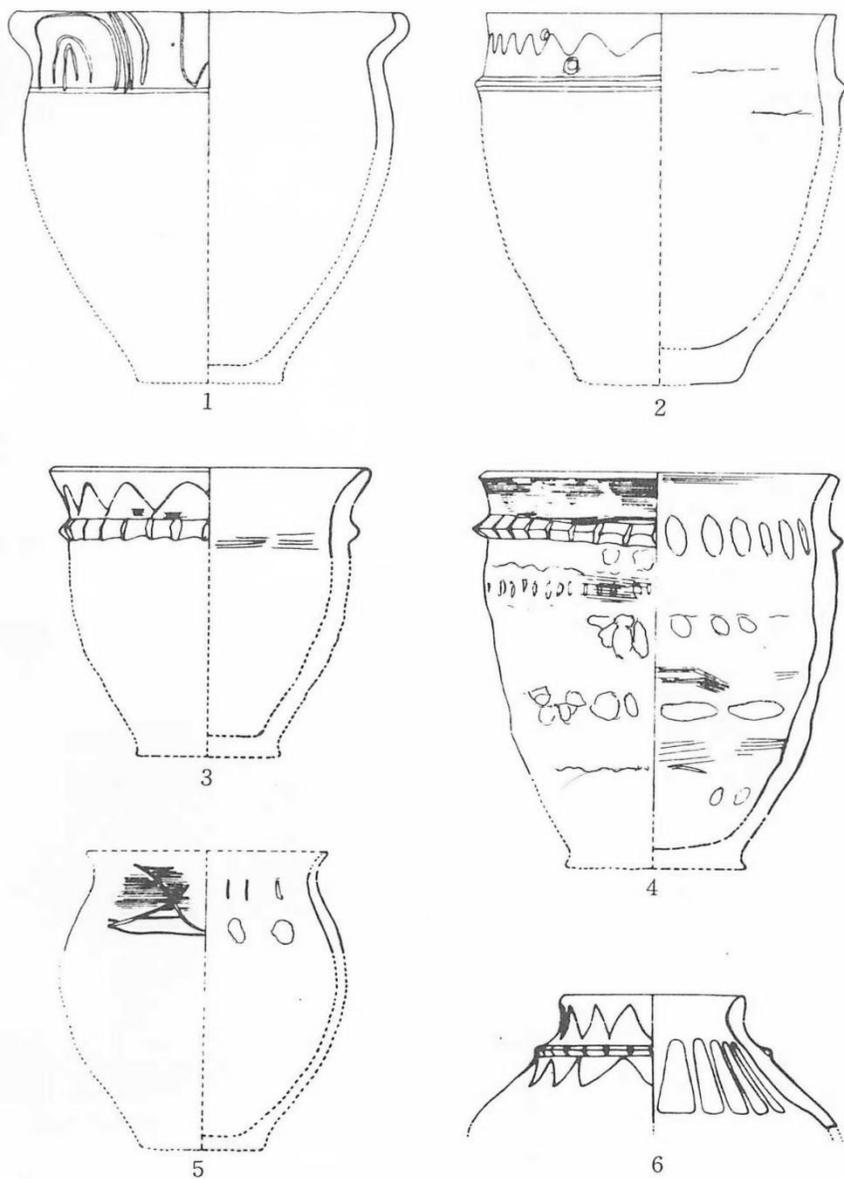
▲ 5-1 サウチ遺跡—弥生前期住居址

▶ 図B. 弥生式土器
(サウチ遺跡出土)

▼ 5-2. 弥生前期甕形土器(サウチ遺跡出土)



図D. サウチ遺跡出土・兼久式土器ほか



7-2. サウチ遺跡出土・弥生中期の土器、地元文化との融合を示す

7-1. サウチ遺跡出土貝符(弥生中期)

(一) 弥生前期

中層の下部に包含層があり、楕円形の縦穴住居址、中に珪岩の円礫十一個を配置した土壇どこう、底部にオオツタノハ製貝輪を納めた土壇が発見された。土器は壺、甕、鉢が出土し、大半は本土から移入したもので、南九州西岸にまれに見られる特殊な土器も含まれるが、地元で作られたと思われるものもある。

壺形土器は破片のみで、復元できないが、前期前半の特徴をよく示し、紅褐色のよく研磨された土器で、頸部と胴部の境に沈線をめぐらしている。

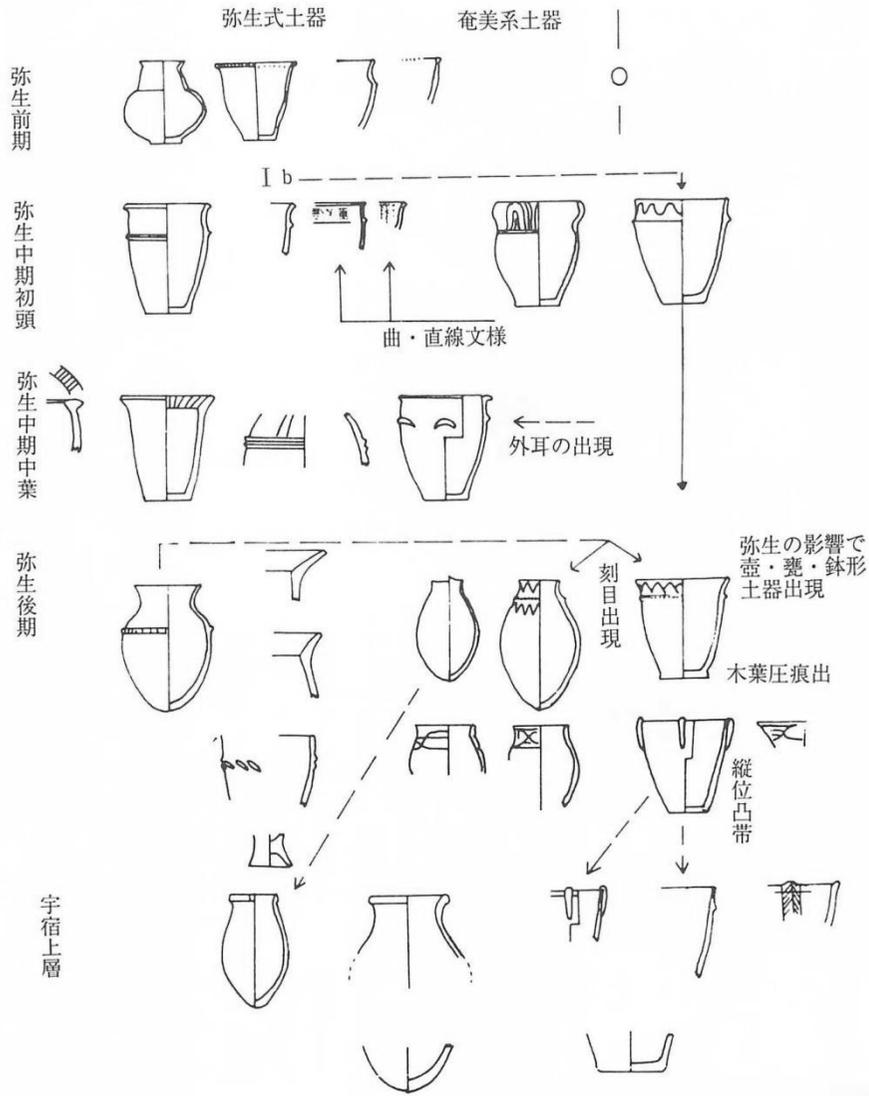
甕形土器は外反した口縁部の外側に刻み目を施すもの、口縁端に短い凸帯をめぐらし刻み目を施すもの(B図I)などがあり、胴部に張りのない平底の土器である。

住居址からは紡錘車(C図)が出土し、土壇のオオツタノハ貝輪もこの時期のものである。

(二) 弥生中期

中層上部にあたる。中期初頭および中葉の甕形土器が、主として出土している。この時期には移入土器のほかに、

図E. 土器文化の接触と変容



地元で作られた弥生土器の量が増加してくる。これらの土器には、弥生土器の形態を持ちながら、本土では見られない文様を施した土器（B図2）、同じく中期の甕形土器に、三日月状の外耳がつく土器などが出現して、弥生土器に地元などの文化要素が結びつく形態が現れる。また一方では、中期の弥生土器に相伴して、地元の土器と見られる、キャリパー形の口縁部に曲線文を施した甕形土器（D図1）や、兼久式土器の祖形と見られる土器（D図2）などが出土し、この時期は、波及してきた外来の弥生文化と、在来の地元文化とが接触して、目まぐるしいような反応を示している。（E図）なおこの時期には、種子島広田遺跡に見られる饗饗文類似の文様を彫った貝符も出土して、いやが上にも文化の多様性を見せつけるのである。

(三) 弥生後期

上層にあたる。破片でまとまったものが少ないが、九州の後期弥生土器に見られる、肩部または胴部に刻み目凸帯をめぐらす壺形土器、口縁部が外反し、内側に稜線を残し、上げ底の脚台を付ける甕形土器が出土し

ている。これに相伴する地元の土器は、頸部に刻み目凸帯をめぐらし、口縁部に鋸歯状の沈線文を施す甕形平底の土器（D図3、4）およびこれとセット関係にある同種の壺形土器（D図5）で兼久式と呼ばれるもののほか、口縁部に曲線文を施す壺形土器（D図6）や、縦位の凸帯を添付する甕形土器などが出土している。

上層からは、鞆口（F図）および鉄器破片が出土しており、この時期には早くも製鉄技術まで伝来していたことを示している。中期には弥生土器と奄美の土器との間に相互の影響が



8-1. サウチ出土・兼久式土器

見られたが、後期には弥生土器の影響のみが目だつてくる。

± 800Y・B・P・(N-3103、上層出土の木炭、C-14、1920
± 800Y・B・P・)

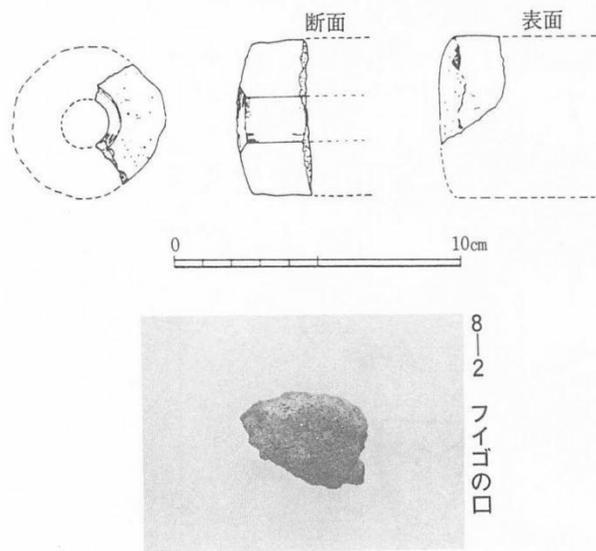
八 遺 構

(一) 住 居

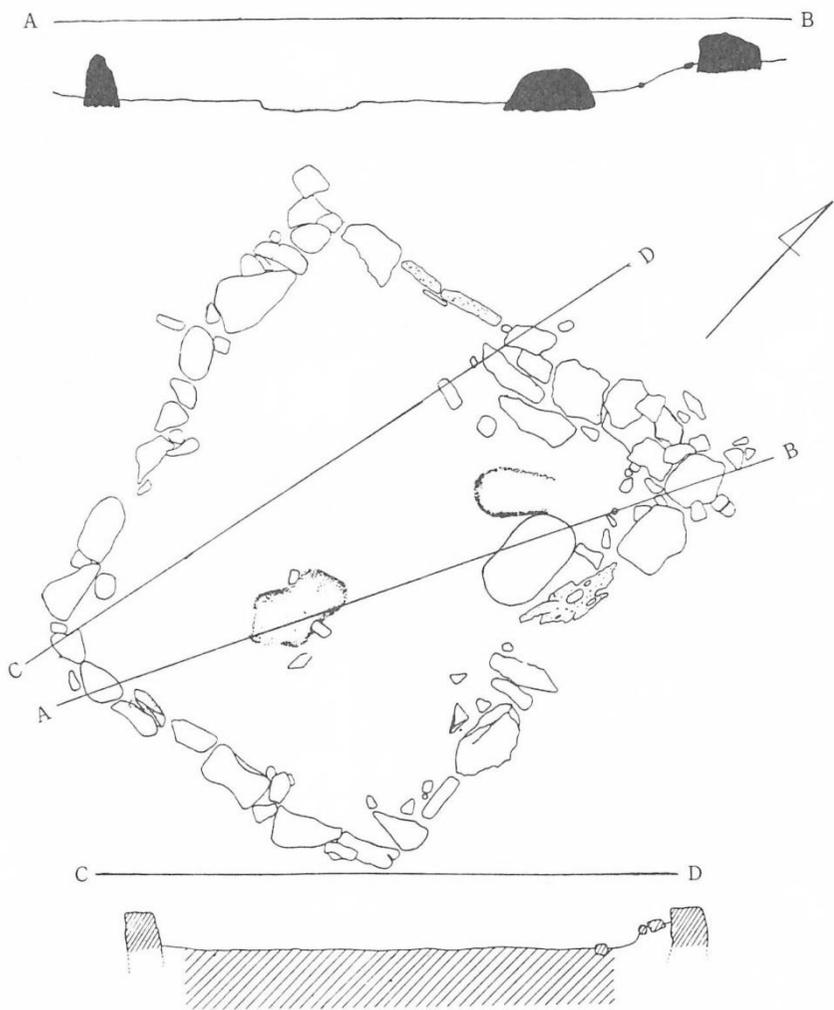
奄美諸島では、宇宿上層式の時期に石囲の住居址が見られる。宇宿貝塚では昭和三十年の調査で石囲い住居址一基が発見され、昭和五十三年の調査では、その北西十メートルを隔てて、同型式の石囲住居址一基が発見された。昭和三十年に発見されたものはほぼ方形をなし、内側は約二メートル、外側の各辺は約二・三メートルで、径二十〜六十センチの塊石を用いている。内側には根石を使用したところもある。この石組の一部には、石皿の破片を使ったところもあった。北側はやや開き加減である。北東隅には礫が多くつまれ、これに囲まれた部分では木炭が多量に発見された。

石囲内の床面、中央よりやや南よりに、瓢箪形の炉ひょうたんがあり、内部は土が焼け、木炭片が多量に発見された。床面から宇宿上層式の大型土器片や「しい」の実が出土し、特に「しい」の実しいは北西隅組石の内外から多量出土

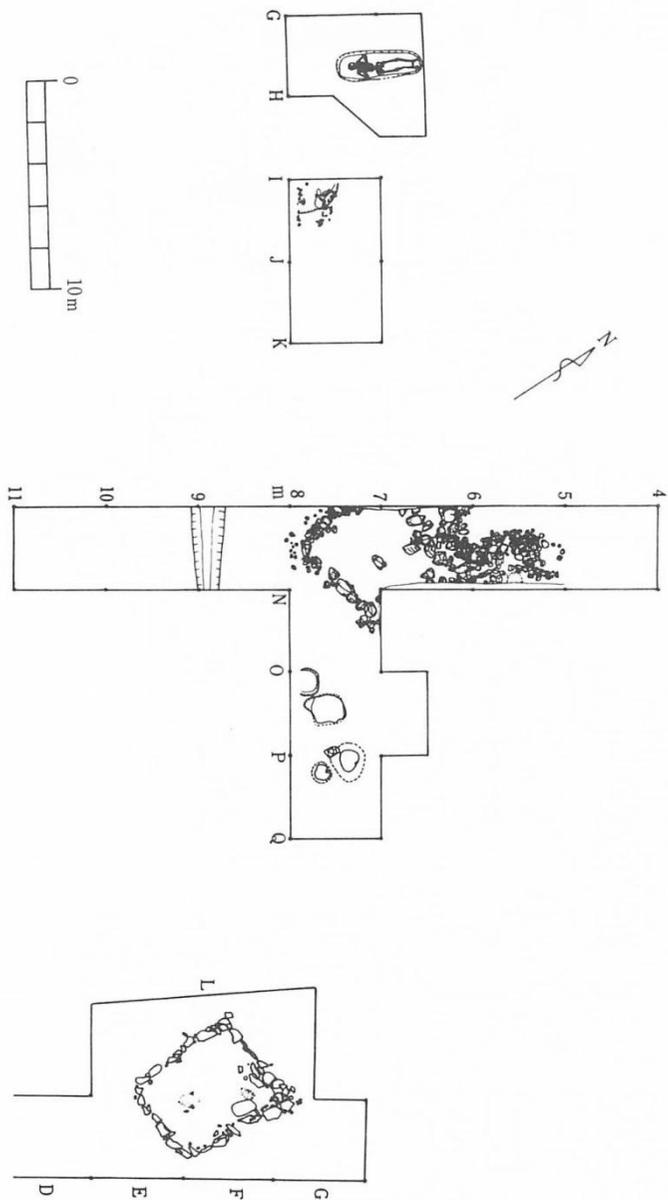
図F. サウチ出土・^{ふいごぐち} 轆口



図J. 宇宿貝塚住居址



図I. 宇宿貝塚遺構分布図



した。(丁図)

昭和五十三年に発見された石囲住居址も、前のものと同時期でまったく同規模のものである。ほぼ方形で、内側は約二メートル、外側の各辺は二・五メートルで、炉址は発見されなかったが、床面の南西隅は、土が焼けて赤褐色を呈していた。組石北辺は、石が多く積まれ、ほぼ完形の壺形土器が、礫に囲まれて出土した。床面は全域に木炭片が散布し、獣骨片・魚骨片・貝殻などが点々と発見されている。(一図)

この二基の住居址を通じて、不思議な現象が発見された。それは住居址の上に大量の角礫や円礫が堆積していたことである。礫のなかには自然礫のほか、人工の加わった礫も含まれており、自然の堆積という考えもあつたが、遺跡地の周辺の低地より、数メートル以上高い孤立した砂丘であり、風成層であることから、礫が住居址の上だけに、自然に堆積することは不可能であることが判明した。

人工による堆積と考えると、その理由が問題である。住居址が廃絶した後にはわざわざ大量の礫を運搬して、堆積する必要性は考えられないから、住居が営まれていた

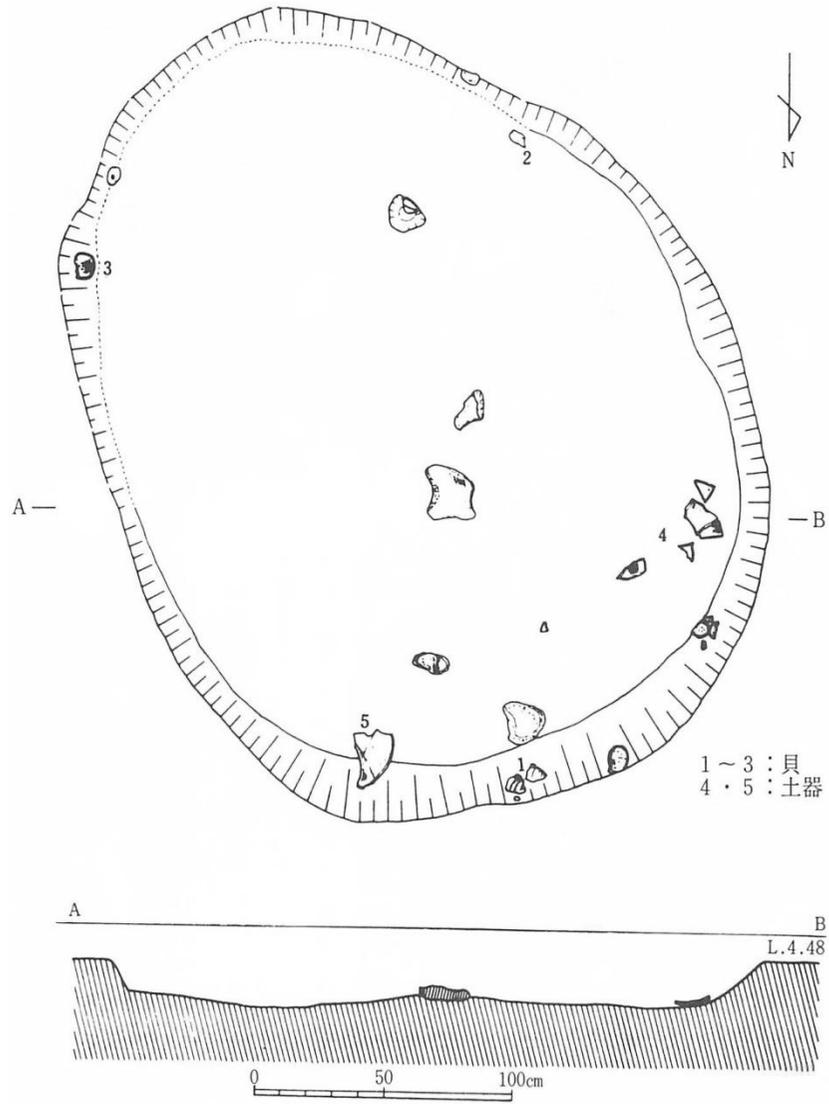
時期にはすでに、礫は存在していたと考えられる。とすれば、屋根の置き石以外には考えられない。台風常襲地帯の奄美に成立した遺跡地としては、なんらかの暴風対策を講じなければ、生活が成立しなかつたにちがいない。置き石屋根もその一対策であつたと考えることができ

る。

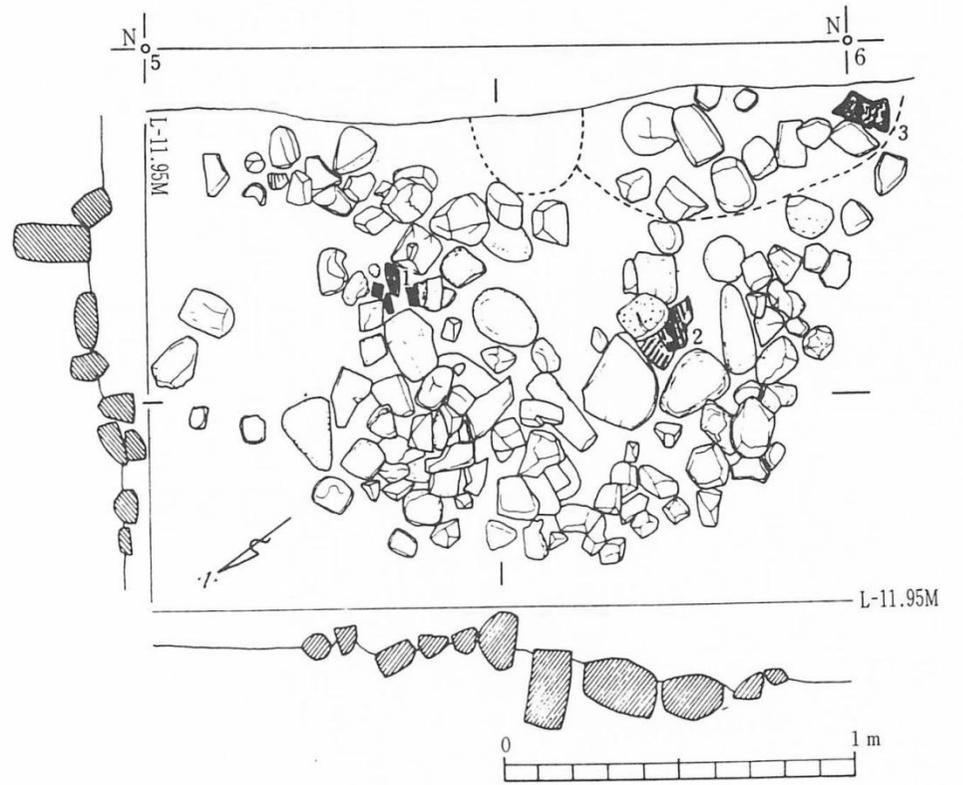
宇宿上層式の時期の住居址は、沖永良部の住吉貝塚でも発見されているが、これについては後に述べる。宇宿上層式以前の住居址は、今まで発見例がなかったが、昭和五十三年の調査で、宇宿貝塚において、面縄東洞式の時期の敷石住居址が発見された。半分は未調査であるが、直径二メートルの円形敷石住居址であつた。床面は大小の礫を、平坦面を上にして、平らに並べ、中央部へわずかにくぼみ、中心付近には、深さ三十センチの船底状の炉が設けられ、木炭片・有機物が検出された。床面からは、面縄東洞式土器二カ所、市来式土器一カ所のほか、貝匙、貝斧、叩石などが発見された。(L図)

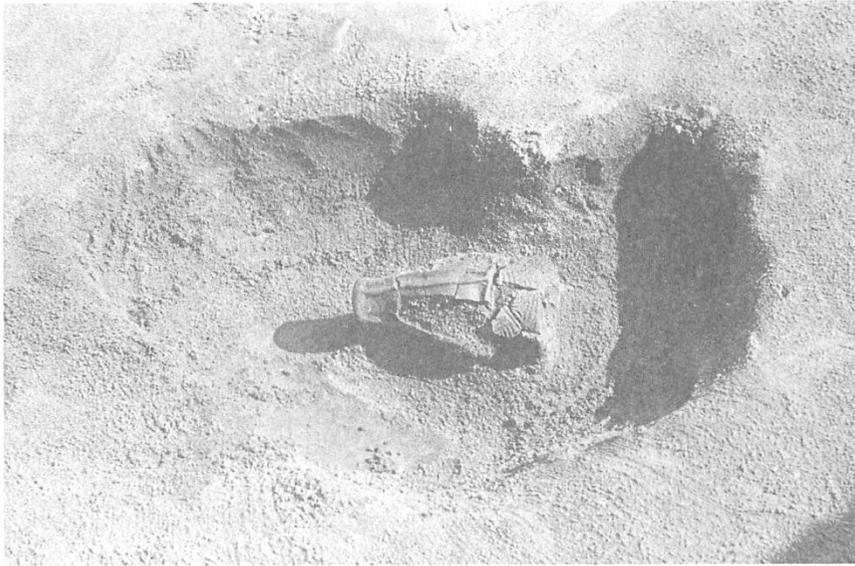
弥生時代の住居址としては、笠利町のサウチ遺跡に、前期の縦穴住居址が発見されている。長径三百一センチ、短径二百四十六センチの不規則な楕円形で、深さは

図N. サウチ遺跡弥生前期住居址



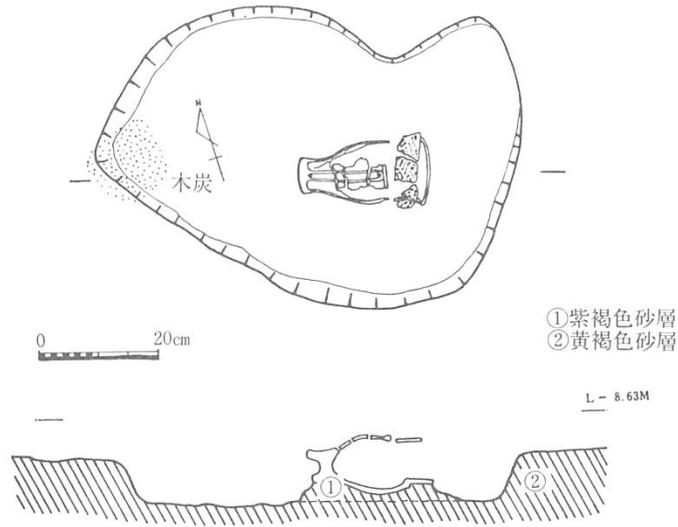
図L. 宇宿貝塚敷石住居址
(1・2 面縄東洞式土器 3 市来式土器)





9-2. 二重口縁土器の出土状況(嘉徳遺跡出土)

図0. 二重口縁土器出土状況



図M. 二重口縁土器



9-1. 二重口縁土器・面縄東洞式
(嘉徳遺跡出土)

(二) 特殊土壙

十七センチの浅いものである。炉址、柱穴は発見されていない。住居址内からは、土器のほかに土製の紡錘車が出土している(N図)

瀬戸内町嘉徳遺跡で発見された、二重口縁土器は、二個発見された。高さは二十センチと十八センチの共に小形の土器である。面縄東洞式である。関東・中部地方に見られる香炉形の釣り手土器と異なり、細身の壺形土器である。上げ底で、胴部はやや張り、頸部はしまり、口縁部は二またに分かれ、内側は壺状にすぼまり、外側は外反し、いわゆる二重口縁をなす。

上げ底の底部下面から外面へ通ずる穴四カ所(小型の土器は二カ所)と、これと対応して、頸部に四カ所(小型の土器は二カ所)、内外の口縁の中間に通ずる穴を設けている。この穴は、底部から、口縁の二又中間へ紐を通して、つるすためのものである。しかも、紐を安定させるために、紐道の両側に粘土帯を張り付ける工夫を施している。二重口縁土器の今一つの特徴は、二又口縁の中間から、土器の内腔へ通ずる穴が四カ所(小型は二カ

所) 設けられていることである。

関東・中部地方の釣り手土器は、土器の主体部に、懸垂するための釣り手を付設したものである。したがって、本来は据え置いて使用したもので、鉢形または皿形の土器であり、上面は開放されていた。防虫香炉とすれば、煙の上昇する性質を考えると、懸垂して高所に上げるほど、効力は減殺されるが、灯火器とすれば、懸垂の効果は大きく、むしろ灯火器とする方が、実情に合うものと考えられる。

使用法としては、窓が大きく、懸垂に用いる紐がかりは、釣り手の部分に取り付けられているから、運搬には適しない構造で、屋内で静止した状態で使用したものと考えられる。

二重口縁土器の場合は、懸垂用の紐は、底部で土器の全重量を支えることになる上に、器形が壺形で、釣り手土器のような大きな窓がなく、小型で軽量であるために運搬、移動に適している。おそらく携帯用として作られたものである。ただし口径がわずかに四センチ（大形の土器）で、容量も小さいために、中にもものを入れるには、大きな制約があり、おそらく特殊な物を入れたと考

えられる。

二重口縁土器の出土状況を見ると、小型の土器は、遺跡の西南隅に、石囲の中から発見され、大きい土器はそれより十数メートル離れて、東北隅の土壙の中から発見された。石囲の中の小形の土器には、焚火^{たきび}などを受けた様子は見られなかったが、大きな土器は、縦七十センチ、横四十一センチ、深さ九センチの土壙の中央に、横倒しの状態で発見された。これは当初より故意に横位に置き、焚火を行ったもので、土器の上面は火熱を受けて変色していたが、下面の土に接していた部分は、何の変化も受けていなかった。

二重口縁土器が、遺跡両隅に設けられた、石囲いと土壙のなかに配置され、しかも大きな土器は、通常の煮炊きと異なる状態で、焚火を行っていることは、特殊な意味をもつて行われたことを感じさせるものである。

懸垂用の土器という意味で、釣り手土器としたが、内容も異なり、発生についても別系統と考えられ、むしろ携帯土器と呼ぶのが適当と考えられる。しかし一面では、呪術的な用途をもつことが、その出土状況から考えられ、単に携帯用とするだけでは、その呪具としての性格を表

現できないうらみがある。

この特殊な土器の系統については、最も関連の深い市来式土器について見ても、類例がまったく見られない。複雑な構造と機能をもつこのような土器が出現したことはまったく驚きである。(MⅠ-O 図) おそらく、習俗に根ざして新たに工夫考案され、創造されたものであるう。

(三) 埋葬土壙

宇宿貝塚では、遺跡発見のきっかけとなった、昭和八年の県道工事中に、壺を抱いたような格好で人骨が発見されたという。現在県道は、遺跡の東に沿ってほぼ南北に走っているから、この人骨は、石囲い住居址より東側に発見されたわけである。

昭和五十三年の調査では、西側の石囲住居址より北西方向十メートルの地点から、母子の埋葬址が発見された。

埋葬土壙は、地表より五十五センチの深さにあり、底面では長さ百八十五センチ、幅七十一センチ、深さ三十七センチの隅まるの長方形を呈する、袋状の土壙であった。土壙上面は底面より狭く、長径百五十七センチ、短

径六十センチの楕円形で、表面に清浄な砂をまき、その上を、自然礫を用いて一部被覆している。

埋葬の時期は、土壙内の遺物から見て、宇宿上層式土器の時期と考えられ、弥生時代後期に該当するものと思われる。

母子と思われる二個の遺体の合葬で、その方法も極めて特殊なものである。

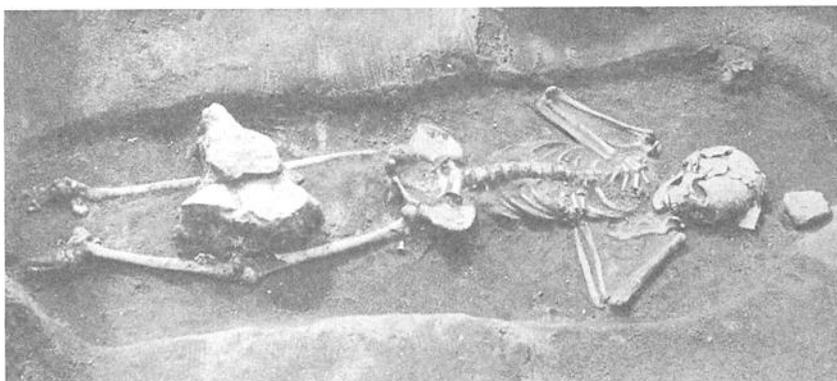
成人の遺体は土壙の中軸に沿って、S W 35°の方向に、仰臥屈葬され、顔は斜め左に向け、両手は曲げて、右手は胸に、左手は腹上に置き、両足は伸ばしているが、左脚は少し曲げて左膝がやや外側へ移行していた。骨の保存状態は良かったが、右半身に比べれば、左側はやや劣っていた。両膝の間には、四個の礫と磨製の小形石器が配置され、これを除くと、真下に嬰児骨^{えいじこつ}の埋葬を発見した。

成人骨は頭頂骨から踵骨^{しゅうこつ}まで、現場で測った結果では、身長が百四十五センチで低い方であるが、骨格がきやしゃであるために長身のような感じを与えた。四肢骨の粗面は発達がほとんど見られず、生前、労働に従事していなかったことを示している。年齢は二十〜二十五歳の

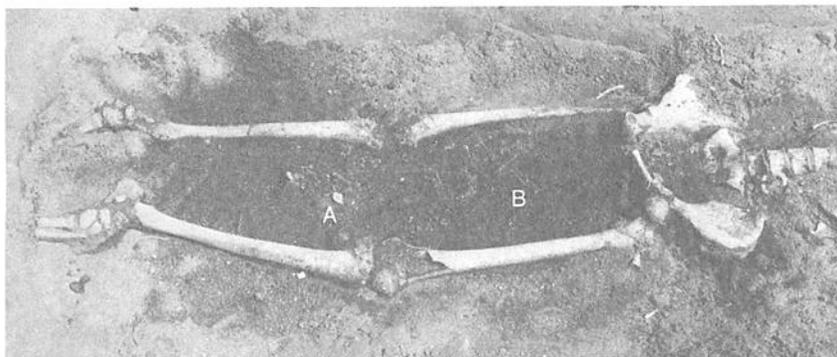
宇宿成人骨出土過程



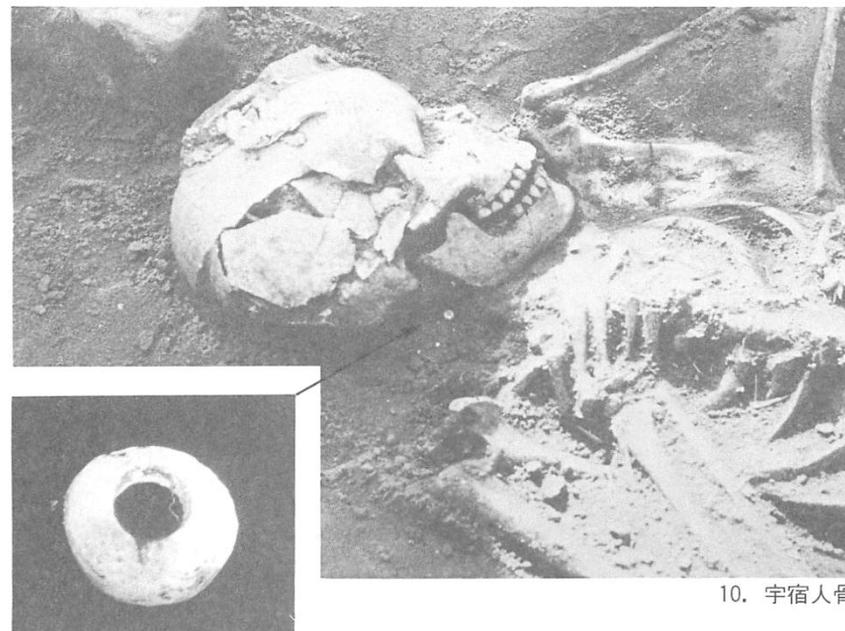
11-1. 上半身出土 下半部は埋葬時の状況



11-2. 石の下に新生児骨



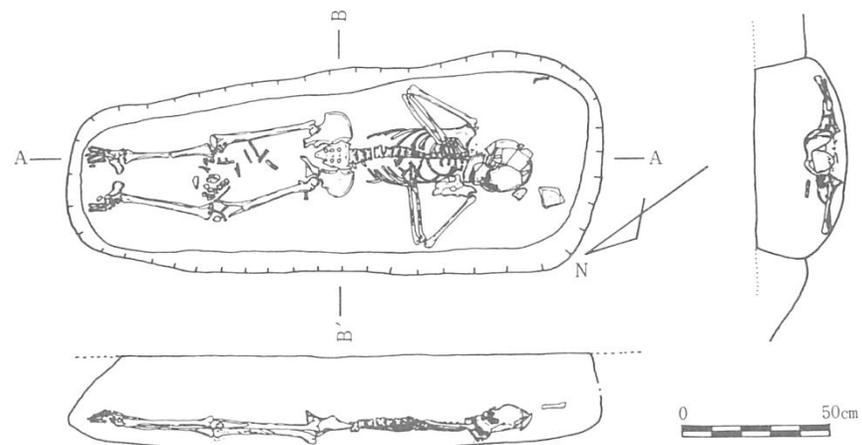
11-3. A 新生児の頭骨, B 新生児の四肢骨



10. 宇宿人骨

ガラス小玉(青色半透明色)黒点は気泡, 黒線は巻痕(巻きつけ法によって製作したもの)

図P. 宇宿貝塚埋葬人骨



女性で、ガラス製丸玉二個、同小玉四十個、骨製管玉四個を首にかけた状態で玉は右耳のあたりから後頭部へかけて発見した。

嬰兒骨は、成人骨の両足の間に狭まれて、四個の礫の真下から発見された。頭部を成人骨の左膝関節に接し、成人骨とは方向を逆にして、脚部を成人骨の右大腿骨の半ばあたりに置き、やや右向きの姿勢で埋葬されていた。頭部から脚部までの長さ三十センチ、幅十五センチの範囲に分布し、頭骨は平坦にひらいているが、右側面やや原型をとどめ、左上腕骨・尺骨・橈骨は胸のあたりに、ひじの関節で浅く「く」字状に屈折して明瞭に認められ、両脚は大腿骨・脛骨・腓骨左右ともにそろっており、右足は上体と直角をなして前方に伸ばし、左足は深く屈折してその上に重ねた状態であった。嬰兒骨の直上は、四個の礫で、頭部から胸部へかけてすっぽりと覆われ、礫群に浴って、長さ四センチの、二等辺三角形に近い、小形磨製石器が副葬されていた。

両遺体は、袋状土壙を掘って、その床面に置き、嬰兒遺体を礫で被覆したのち、土を埋め戻し、最後に、他より運んだ清浄な砂を散布し、成人遺体の上半身の直上あたり磨製石器が副葬されていた。

個・棗玉一個・塞杆状ガラス器五個が、着装の状態を推定できるような連珠のままの形で出土した。これは女性の頭飾とされている。

弥生時代後期には、着装の位置が判明する数も増加している。たとえば、三津永田遺跡の石蓋を有する単甕では、遺骸の頸部から小玉数十個が発見され、対島塔ノ首遺跡の2号棺では、ガラス玉類が胸から頭にかけての位置に散乱して出土した。福岡市宝満尾遺跡の15号土壙墓では頭の位置に、小玉五百四十個が出土し、首にかけていたものと推定された。また、福岡県門田遺跡辻田地区の石蓋のある土壙墓の遺体頸部付近から百八十個の小玉が数条になり、両耳付近には数百の泡玉が環状をなして出土している。以上にあげた例でもわかるように、おおかたは頭飾として着装されており、検出例は北九州に限られている。おそらくガラス製玉類を、連珠として頭飾とする風習は、北九州で農耕を生産基盤とした新しい社会構造が形成されていき、その中での特異な身分(司祭者)の人々の間に産まれたものであろう。はるかに遠く海山を隔てた奄美の宇宿貝塚において、北九州と同じガラス製玉類の連珠頭飾を着装する風習の存在が明らか

たりに、礫を配置している。(P 図)

宇宿貝塚の埋葬法は、配石墓で土壙の上面を、一列に半周する程度の配石である。標識としての意味をもつのであろう。袋状土壙である点に特色があり、他に類例を見ない。母子埋葬の例は、縄文後期福岡県山鹿貝塚に、成人女性二体の間に一体の乳児骨を葬った例があつて、母子関係が推定されているが、股間に新生児を納めた埋葬はめずらしい。分娩によつて母子共に死亡したものであろうか。

新生児には、特に四個の礫によつて被覆を行い、成人骨には被覆が見られない。この差別はいかなる理由にもとづくものであろうか。疑問の生ずるところである。新生児には、小型の磨製石器が副葬されているが、石器時代にあつては副葬品は、被葬者が生前に着装していた身体装飾品に限られた感があり、この例はきわめて特殊なものといえよう。副葬された小形磨製石器は、一種の儀器であろう。

ガラス製玉類が、連珠として身体に着装されたことが確実になるのは弥生時代中期で、福岡県立岩遺跡(弥生中期)28号甕棺からガラス製管玉五百五十三個・丸玉一

になったことは、その文化の伝播が意外に急速に行われたことを感じさせると同時に、サウチ遺跡における弥生文化の定着、宮崎県大萩遺跡、鹿児島県広田遺跡におけるガラス製小玉の発見などの背景を考えると、伝播の必然性も首肯できる。

成人被葬者は百四十四・八一センチと低身長で、短頭・低顔であり、種子島広田弥生人骨の形質に、類似点が多いという。上腕骨は短くて細く、三角筋粗面の発達も悪く、扁平性も認められない。大腿骨も同様で、短く、粗面の発達もきわめて悪く、頸骨も短くて細く、骨体の扁平性は認められない。以上の特徴から被葬者は生前に労働を全然行っていなかったとされている。

被葬者が属する社会で、特殊な、たとえば司祭者というような身分の人と推定されるが、その身体的特徴が明らかになったことは、大変興味のあることで、身分と身体的特徴のあいだに、必然的関係があるとすれば、司祭者の日常生活の一面も考察することができるであろう。